

ひと呼吸

#14 Omura Miho



私たちの日常。
それは多くの営みの
連なりである。普段、それぞ
れの行為の意味を考えることは少ないが、ふと
立ち止まって考えてみれば、そこには偶然と必
然が潜んでいることに気づく。
呼吸。そのような自然な行為ですら、太古にお
ける偶然と必然の産物であったといえるかもし
れない。

この「ひと呼吸」が、手に取った人の日々の呼
吸（營み）を見つめ直すきっかけとなり、そし
て、それぞれの日常のなかでの「ひと呼吸（休
息と起點）」になれば嬉しい。

Editor's Note

2022年、秋。京都から筑波へ行くのにはそれなりに時間がかかるものです、会いたい人に会いに行くという行為においては、それなりに時間がかかるというのは案外心地が良いものでもあります。

歩くことが好きな私は、つくば駅から時間をかけて筑波大学に向かいます。足下には不揃いなドングリとたくさんの枯れ葉が落ちていて、気がつけば、いつものようにそれらに手がのびます（枝でも、まつばっくりでも、何でも「途中」で捨てるのが昔からのクセ…）。

人はいつも「途中」を生きている。何かを決断した時でも、何かにたどり着いた時でも、それはその先の道の「途中」でしかありません。大村さんの生きてきた「途中」の積み重ね。それぞれの場面で考えたことや目指したこと、一つ一つは異なる要素に見えたとしても、それが影響し合っていることがよくわかります。何より、仕事上はよく知っているつもりだった大村さんが、今回のインタビューで「立体的になった」というのが、私の率直な感覚でした。

ハングリー精神という表現がチープにきこえてくるほど、大村さんの経験とそこから生み出される感覚・表現力は魅力的です。そして、“周縁を視野に含むことができるセンス”は私もしっかりと見習いたいと思いました。

今回のインタビューもまた、お互いにとっての「途中」でしかありません。また違う場面で交わって、お互いの「途中」が更新されていくことが楽しみです。

(村田淳)

Concept

障害のある学生が高等教育にアクセスする権利を保障するための取り組みである「障害学生支援」には、その主人公である学生と対話し、ともに行動してきた多くの実践者たちの存在があります。こうした実践者一人ひとりには独自のバックグラウンドがあり、またそれぞれの考え方や想いをもって形作ってきた歴史があります。

私たちは、これらの「人」によって蓄積してきた考え方やその想いを知ることが、これから障害学生支援を考えていく上で貴重な機会となり、この分野の魅力を知ることにつながると考え、この『ひと呼吸』を発行することにしました。ここに綴られているのは、私たちを含めた一人ひとりの関係者にむけた応援のメッセージです。

ひと呼吸・編集委員会

村田淳（京都大学）

船越高樹（国立高専機構本部）

宮谷祐史（京都大学）

木谷恵（フリーランス）

発行／高等教育アクセシビリティプラットフォーム（HEAP）

Address 京都市左京区吉田本町

京都大学学生総合支援機構内

Web <https://www.assdr.kyoto-u.ac.jp/heap/>

Mail heap@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

Tel 075-753-5707



HEAPウェブサイト上に本紙PDFデータ及びテキストデータを掲載しております。